

7.30 summer 2026

〒810-0001福岡市中央区天神5丁目2-1

公益社団法人 福岡県美術協会(福岡県立美術館内)

tel 092-713-4200 fax 092-791-1472

E-mail: fasartseven@wing.ocn.ne.jp

https://fukuoka-ken-art-society.com/

X(旧 Twitter)@fasartseven



作品探訪 「日向神」

古野 靖弘 (日本画部名誉会員)

正面岩、蹴洞岩(けほぎいわ)、七福神に準え名付けられた奇岩がそそり立つ日向神峡、日向の神々がその美しさに見とれ降り立ったという伝説が残る。3×6判4枚に描かれた姿は、荒々しく永きに渡って風雨に浸食された蹴洞岩。幾度も崩れ、壊落する岩肌に這い上がるように芽吹いた草木の命を描いたのだと言う。



「日向神」縦1.8m 横3.6m



「陶器の郷」F120号

唐臼の音、水の音、谷間に響く音、風、小鹿田の印象を作画した。ただ、理想としては、3×6判4枚の予定であったが、残念である。

草木は地植え、鉢植えと、季節、天候に左右されながらも、いつでも描けるように手元に置いた。鳥も、同じく餌をやりつつ、モデルとして大切に飼い、小鰻、軍鶏、特に雛から育てたフクロウと生態も良く分かり、楽しく描いた。

自然のもたらす荒々しさと生命の強さ、優しさを交ぜ、その息吹を感じさせる。生きた風景として目前に現れる感動が迫ってくる。

幾度も足を運び対岸からくり返し描いた写生。崖から落ちてくる小石を避け、身近に巨大な岩を見上げ、その岩肌と向かい合う中で、絵を描く基本となる見方、生写(しやうしゃ)生けるもの、その生きる様を写し取るへと立ち返ったと言う。

生写、多様な生を受け取る術は、日本画を学んだ京都の気運に培われたのかも知れない。「高校生の頃、画集で村上華岳、神原紫峰の絵を見た。以来とりつかれ、学びたい気持ちで強く京都へ。教師紹介の時、紫峰が目の前の神原紫峰先生であることに驚き興奮した。」

当時、京都市立美術大学の教授であった神原紫峰は、四条派の写生を大切にし、技巧、工芸的な装飾性に走ることなく自然観察の重要性を説いた。鶉の写生授業ではその鳴き声まで教えたという。

また同時に、紫峰と共に国画創作協会を設立した村上華岳、土田麦僊等の重鎮、そして京都市立美術大学の卒業生を中心とした前衛的な日本画グループ、ケラ美術協会(榊健一)等、パシフィック美術協会(下村良之介)等の活動にも触れ、共に新しい日本画を創成するという京都画壇の改革精神や多様性に触れた日々でもあった。

筑豊の宮田町で幼少期を過ごす。小学校に掛けてあった大きな色刷りの図版、狩野芳崖の「悲母観音像」に心奪われる。その頃の故郷は日本の原風景そのものだった。

20代、国東半島、石仏、久住、阿蘇、虹ノ松原、耶馬溪、日向神と足(車)を使って現地に赴き描いた。



1941年 宮田町に生まれる
(現宮若市)

京都市立美術大学卒業
(現京都市立芸術大学)

1957年 (社)福岡県美術協会 会員
1976年 (社)福岡県美術協会 理事
2005年 (公社)福岡県美術協会 理事長
2011年 (公社)福岡県美術協会 監事
2015年 (公社)福岡県美術協会 名誉会員

日本画 玄霜会 会員

2012年 福岡県教育文化表彰

2018年 文部科学大臣地域文化功労者表彰

【作品収蔵先】 福岡県立美術館・福岡県教育文化振興財団
福岡県スポーツ振興公社・福岡海星女子学院
福岡大学・笠松小学校(現宮西小学校)

(インタビュー書き起こし: 津田三朗)

樹齢400年以上のこと。雨に打たれないように覆いで保護され古色の紅系であるが、自宅の白牡丹として着色した。

描くために大切なことは、幾度もよく観察をし、「自分なりの見方を見つけること」そして必要の無いものを如何に整理するかを考える事だと思う。



「牡丹」F100号